

第十回 榎茂都
うめもと うめきぬはな
梅衣華 舞の会

平成三十四年三月二日(金)

開場午後五時半 開演午後六時 紀尾井小ホール 入場料六千円(全自由席)

■お問い合わせ・チケット販売 ■華の会事務局 TEL 075-491-8968 FAX 075-491-8980 ■紀尾井ホール・チケットセンター TEL 03-3237-0061

地唄

道中双六

上方唄

霧の雨

地唄

出口の柳

第十回 榎茂都 うめもととうめきぬはな 梅衣華 舞の会

地唄 道中双六

立 方 榎茂都梅衣華

唄・三弦 竹川 裕
三 弦 井上満智子

京都を振り出しに、東海道五十三次をたどって江戸の日本橋を上がりとする道中双六になぞらえて、街道沿いの風物を描いた作品です。何度も繰り返される短い三味線の合の手の効果もあり、各地の廓のありさまや風俗がいきいきと、しかもテンポよく描写されています。当時の宿場町の様子を知る上でも貴重な作品です。

上方唄 霧の雨

立 方 榎茂都梅衣華

唄・三弦 竹川 裕

正統な地唄とは違い、市井や遊里の名もない庶民によって創作され伝承された上方唄には、独特の味わいのある名曲があります。「霧の雨」もその一つです。しつとりと哀愁を帯びた歌と絶妙な三味線の調べにより、小品ながらも深い陰えいのある曲となっています。



地唄 出口の柳

立 方 榎茂都梅衣華

唄・三弦 松島 弘美
三 弦 井上満智子

出口の柳とは、今も京都島原の大門口にある柳のこと。廓遊びに出掛けて大門を這入るときは、気もそぞろで柳に気がつかないが、帰るときは、名残りを惜しんで振り返ると目にとまるので、出口の柳と言われるようになったとのことです。大門の脇から、浮かれにぎわう遊里を眺め続けた一本の柳を題名に持つこの曲は、表面の華やかさとはうらはらに、はかなくも哀しい遊女のさだめを表現しています。元禄時代に流行した歌祭文という曲の形式を色濃く残している点でも貴重な作品で、歌祭文に特徴的な旋律が、三味線の手で繰り返しあらわれ、当時の廓の情景を描写する上で、効果的に使われています。

